540
講談社現代新書

翻訳読本

初心者のための八章

翻訳力とは何よりも日本語を書く能力であり、翻訳者はまず文章のすぐれた書き手でなければならない。文法や辞書一辺倒の生硬な翻訳調や、日本語として通じない誤訳・悪訳はわがもの顔にまかりとおり、日本語の乱れの一因をもなしている。二つの言語の出遇いの場では、単語・文形の《相同（ホモロジー）》《相似（アナロジー）》にしばられるのではなく、文意の息づかせることがたいせつである。美しい翻訳とは何か、日本語らしい表現とは何かをめぐって、翻訳の真髄とその心得を、豊富な実例をもとに説きあかした、初心者のためのABC。

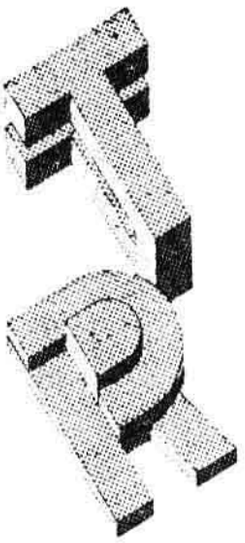
別宮貞徳

翻訳読本
昭和五四年四月二〇日第一刷発行
定価——三九〇円
著者——別宮貞徳
© Sadanori Bekku 1979 Printed in Japan

発行者——野間省一　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一一二　電話〇三—九四五—一一一一　振替東京八—三九三〇
装幀者——杉浦康平＋鈴木一誌
印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
0282—455406—2253(0)
落丁本・乱丁本はおとりかえします（学1）

翻訳読本

初心者のための八章



別宮貞徳

講談社現代新書

目次

1—第一に必要なこと——5
2—美しい翻訳のために——21
3—翻訳とは意訳である——37
4—日本語らしい表現——51
1—日常語を使おう　52
2—代名詞を削ろう　66
3—文法を忘れよう——関係代名詞　84
4—名詞から動詞へ　97
5—修飾句は短く——逆行から順行へ　107

5—木を見るよりは森を見よ——127
1—一語一語の忠実はナンセンス 128
2—発想順を重んじよう 143
6—相似（アナロジー）ではなく相同（ホモロジー）を——155
7—センス・オブ・ヒューマー——171
8—常識と想像力を働かせよう——189
あとがき——206

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1——第一に必要なこと

十九世紀アメリカの教科書より

Ap-ple.

Arch.

A-corn.

Ar-row.

A-vo-set.

Adze.

An-chor.

Axe.

Boy.

Book.

Ba-by.

Bar-rel.

Bud.

翻訳界は大盛況

もう二、三年も前の話です。国連大学で翻訳官を募集するという記事が新聞に出ました。国連大学は国際的な機関で外国語には強いはずだから、今さら翻訳官などしかつめらしい職は必要あるまい、と思うのはしろうと考え。「日本語が達者な外人、外国語がペラペラな日本人はいても、翻訳はまた話が別」という趣旨の説明を見て、わたしはさすがは国連大学と意を強くしました。

そこでさっそくせちがらい話になってお恥かしいのですが、その翻訳官の待遇が年収数百万円、国立大学の古参教授並みとあって、どうやらそこまでいっていそうもないわが身にひきくらべていささかうらやましくなくもなく、これは応募者が殺到するぞと思ったら、案の定で、押すな押すなの大盛況。たったひとりの採用に対し最終的に応募者総数はなんと千九百七人に達し、大学の先生、家庭の主婦、ＯＬはいうにおよばず、アメリカから電話で解答を寄せた外人までいたというから驚きます。

似たようなことをわたしも先だって身をもって経験しました。ある翻訳の通信教育機関の主催する夏のセミナーに講師として呼ばれたときのこと。暑いまっさかりに出かけるのがいささかおっくうで、たのまれたからしかたがない、くらいのはんぱな気持で教室にはいったのですが、なかには数十人の受講生が期待にみちた表情で、静かにすわって待っています。三十代、四十代の女性がいちばん多く、中年、初老の男性も点々とまじっている。

その厳粛な雰囲気に多少気押されながら、机の上に置かれた受講者名簿を見ると、その住所が文字どおり北は北海道から南は九州まで、全国津々浦々におよんでいるのです。なかには広島から来て、午後にはトンボ帰りするOLまでいるという熱心さ。最初のはんぱな気持はおかげできれいに消しとんで、朝の九時から夕方四時までティーチ・インをつづけましたが、そのはりつめた空気は、大学の講義の比ではありませんでした。

ところでわたしはなにごとによらずブームというものに懐疑的で、すぐ眉につばをつけたくなるたちですから、翻訳の世界のこの活況についても、そのなかになかば身を置いている人間のひとりとしてありがたい反面、そうそう喜んでばかりもいられないような気も実はするのです。今いった翻訳官志願者や翻訳ゼミ受講者は、けっして年収数百万円に目がくらんだわけではなく、翻訳という知的な作業に生きがいを求めているのだろうと信じます。しかし、世の中にはそうでない人もいるのではないか、翻訳というものに甘い夢を託している人もいるのではないか。そんな心配もなくはないのです。

わたしは大学の英文科に勤めているので、入学試験の面接審査にも試験官として顔を並べます。そこで「将来何をやりたいか」とよく聞いてみるのですが、それに対して最近とみにふえてきた答えは「翻訳」です。大学が学問をする場ではなくなってきた世の中で、英文学の学者、研究者になりたいという希望を述べる人は、もはや砂中のダイヤモンド並み。ひところは商社

勤めや貿易を将来の仕事に望む人がけっこう多かったのですが、今はむしろ翻訳のほうが多いかもしれません。翻訳ならかなり学問的な仕事だから、英文科の教師としては嬉しいかというと、それが実はそれほどでもない。

翻訳をやりたいという志願者に、さらにつっこんでその理由を聞いてみる。そうすると、

「英語なら得意の科目で多少は自信もあるし……」

「英語の力を活用するのにいちばん近道だから……」

というような返事がきまってかえってきます。大学は学問の場ではなくなったにしても、とにかくそこで高等教育を受けた結果がいちばんはっきりした形であらわれるのは、たぶん外国語の能力で、せっかく大学を出たからにはなにかに役立てなければ損だとなると、まっ先に目が向くのは翻訳かもしれません。それに翻訳なら道具も場所も資格もいらない。時間の制約も比較的少ない。辞書と机、ペンと紙があれば万事O・K、しかも年収数百万、国立大学古参教授並みへの道もひらけている……と思うのでしょうか。どうも翻訳を甘く見たデモシカなんとかの感じで、そういう志願者にはお説教のひとつも聞かせたくなります。

外国語の能力と翻訳は別

翻訳とはけっしてそれほど簡単なものではありません。先ほどの国連大学の話にもどるなら、「外国語がペラペラでも翻訳は別」なのです。翻訳者は文字どおり骨身を削る思いをすることがしばしばあります。では、どんなふうに別な

のか、それをこの本でこれから逐一説明するわけですが、第一章のこの冒頭で、いちばん根本的なことをまず話しておきます。

「英語は得意の科目で多少は自信もあるし……」という入学志願者の言葉。おそらくこの志願者に限らず、翻訳家志望者はみな相当な自信をもっているにちがいありません。「ぼく（あるいは、わたし）は、これだけ外国語ができる。だから翻訳家ぐらいなれるだろう」と。これはしかし、たいへんな勘ちがいなのです。もちろん英語――外国語ならなんでも同じですが、一応英語としておきましょう――、英語の能力がなければ翻訳などできるわけがありません。しかし、英語の能力があれば翻訳ができる、あとは辞書とペンと紙があればなんとかなる、というわけのものでもない。「これだけ英語ができる。だから翻訳ができる」と考えている志願者の頭のなかでは、英語の能力と翻訳の能力が短絡的に結びついているようです。

わたしの大学には一般入試とはべつに推薦入試の制度もあって、ここでも面接審査がおこなわれるのですが、推薦入試の面接で同じように「将来何をやりたいか」という質問をすると、「翻訳」と答えるパーセンテージが、一般入試よりもはるかに高い。なるほど、と思います。つまり、高校から推薦されるくらいの生徒なら、学校の成績、とりわけ英語の成績がいいにちがいなく、生徒自身の自信のほども大きいでしょう。それに比例して翻訳志望も多くなる、というわけです。やはり、英語の能力＝翻訳の能力と結ばれているのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おかしいのはそこです。英語がよくできれば翻訳もよくできると考えるのは、一見あたりまえのようでいて、実はあたりまえではない。何がおかしいか、タネあかしにほかの例をあげてみましょう。

日本人は野球が好きで、シーズン中はほとんど毎日テレビとラジオで放送をやっています。わたしもまんざらきらいなほうではないのでよく放送を聞きますが、そのたびにつくづく感心するのは、アナウンサーはなんとよく野球を知っているかということ。

ここはバントだ、いやヒット・エンド・ランだ、ピッチャーは落ちるシュートでダブルプレーをねらうべきだ、いやウェスト・ボールでランナーを刺すのがいい——というようなゲームの技術的、戦術的な面はいわずもがな、だれそれの打率はどうで、ホームランは何本で、過去十試合の成績はしかじかで、など個人の成績、それからチームの状況、リーグの歴史までたなごころをさすがごとく心得ています。いやそれどころか、○○監督は子どもをアメリカに行かせた、○○選手は優勝にちなんで生まれた子どもの名前を優にしたなどなど、プライベートな家庭の事情にいたるまで、微に入り細をうがっていやそのくわしいこと。それくらい知っていないと、アナウンサー商売は一人前につとまらないもののようです。

さてそれでは、逆に、それだけ知っていればアナウンサーがつとまるかというと、そんなバカなことはない。それがわからないでアナウンサーになろうとするのはよほどのバカです。あ

たりまえの話で、アナウンサーになるためには、まずしゃべるのがうまくなければだめ。それがへたなら、いくら野球の知識があっても、野球の放送はできません。しゃべる能力が第一で、野球に関するもろもろの知識などあとからいくらでもつけられます。

日本語を書くセンス

同じことが翻訳についてもいえるのに、同じバカなことが翻訳のばあいにはバカと受けとられないらしい。翻訳者になるためには英語の知識がなければいけません。しかし逆に、英語の知識があるからといって、翻訳者になれるものではないのです。翻訳とは、めんどうな定義は抜きにして、とにかく英語を日本語に直して書くこと。それなら日本語を書く能力がなければだめにきまっているでしょう。はっきりいえば、日本語を書く能力が第一で、英語に関するもろもろの知識は、あとからいくらでも、しかもだれにでもつけられます。おそい早いの差はあっても、だれにでもです。その証拠に、英米人はだれでも英語がわかります。

したがって、英語に少々自信があるから翻訳をやりたいなど、とんでもない見当ちがいで、「作文が得意だから翻訳を……」と考えるほうがまだしも筋がとおっています。「英語なら多少は自信もあるし……」としゃべっている志願者が、「大学にはいったら」という作文の課題に、「翻訳はすごく面白いものだと思いますし、わたしなんかに意外と房わしいんじゃないかと思います」と書いているのを見ると、ろくにしゃべれもせずにアナウンサーになりたがって

いる口だな、という感じをますます深くするのです。

日本語は自分の国語だから書くことぐらいなんでもない、と思うのは考えが浅い。われわれ日本人は、たしかに日本語の読み書き、話ができますが、一応用が足せるだけのことで、書くのがうまい人は、話すのがうまい人と同じく限られています。外国語の知識というのは、主として外国語を正しく理解する知性にかかわることがらです。日本語をりっぱに、美しく書くというのは、適切な言葉を選ぶ才能で、これは感性にかかわること、いいかえればフィーリング、センスの問題です。外国語の知識のように、ただ覚えればすむというものではない。外国語がよくできても、日本語がりっぱに書ける保証にはなりません。

外国語の教師、外国文学の教授はみな外国語がひじょうによくできます。しかし、みながみな翻訳の名手というわけではない。逆に、長年翻訳を教えている経験からいいますと、失礼ながらそんじょそこらの先生よりはよほど翻訳のうまい学生もけっこういるのです。教えているわたし自身が、うまい訳語や表現を学生から教えられることがたびたびある。学生と教師と、英語の知識をくらべたらもちろん問題になりませんが、翻訳の才能——あるいは、センスといいましょうか、それは別ものだということです。

しかし、外国語が少々できるという自信、あるいはうぬぼれだけで翻訳家を志す学生の短絡的発想だけを責めるわけにもいきません。外国語を教えているという実績だけで、その教師が

翻訳を依頼されるような状況が現にこの国にはある。それどころか、経済の本は経済の学者、歴史の本は史学の学者が翻訳しているのが実情です。経済学者は経済、歴史学者は史学というそれぞれの専門の学問には通じているでしょうが、外国語にそれほど練達とは限らないし、日本語のすぐれた書き手とも限らない。そこからりっぱな翻訳が出てくる可能性はかならずしもありません。けっきょくこれは翻訳の軽視ということなのでしょうが、出版界、さらには社会全体はもうすこし認識を改める必要があると思います。

名翻訳家は名文章家

要するに、すぐれた翻訳をするためには、すぐれた文章が書けなければならないこと、いいかえれば、名翻訳家は名文章家であるということ。このごく平凡な事実は、昔から名翻訳家とうたわれている人を見ればわかります。二葉亭四迷、坪内逍遙、森鷗外……などなどいずれも作家として名をなしています。昔だけではなく、今もそのとおりで、翻訳のうまい人は例外なく文章の達人です。かならずしも本職の作家であるにはおよびません。作家であるためには、たぶんもっと別の才能や想像力、ひらめきや思想も必要なのでしょう。しかし作家がもっているものに負けないくらいの文章力はなければならない。

たとえ創作作品はなくても、一流翻訳家の書いたものは、論文でも評論でも随筆でも、あるいは雑文でも手紙でも、見ればたちまちその作者が一流の書き手であることがわかります。逆にいえば、わけのわからないジャーゴン（仲間うちだけで通用する言葉）で煙幕をはった論文を書

く学者先生はもとよりのこと、随筆一本書かせてもさっぱり面白くない教授博士の手から、名訳が生まれる気づかいはこんりんざいありません。

もちろんだれもかれも鷗外、逍遙などと肩を並べる翻訳家になれるものではなし、ならなければならないものでもない。鷗外、逍遙並みの文章家でなければ翻訳者を志すなと、むちゃなことをいうつもりもありません。「名翻訳家は例外的な存在。わたしは一応の翻訳家になれればいいのです」と、おおかたの翻訳家志望者は思っているのでしょう。しかし、ただそれだけのためにも一応の文章力、表現力はなければならない、それがわたしのいいたいことです。

「文章力、表現力とおっしゃるけれど、翻訳ではそんなもの発揮する余地がないんじゃないですか。小説ならなにもないまっ白な紙の上に好きなことを書いていけばいいでしょう。翻訳はもとのものがすでにできあがってしまっている。ただそれをなぞっていくほかないわけです——もちろん、なぞる技術が問題ですが。たとえば五線紙にドレミレドと書いてあれば、ピアノの鍵盤のドレミレドをたたく。それと同じことだと思います。必要なのは五線を読みとる訓練と、それを鍵盤に移しかえる訓練です。ドレミレドという譜をラシドシラと読んだらまちがいだし、せっかくドレミレドと読んだのに、ミファソファミと奏いたら、これまたまちがい。そんなまちがいをおかさないだけの知識と技術がつけば十分だと思います。This is a dog. は『これは犬です。』文章力もへちまもありません。」

ひとりの学生がこういいました。同じような考えをもっている人がほかにもたくさんいると思います。いかにももっともらしい主張ですから。しかし、ここには大きな誤解が含まれています。たまたま楽譜の読みとりが例に使われているので、音楽を手がかりに翻訳の本質を考えてみましょう。

指揮者によってちがう第五

譜面にドレミレドと書かれていれば、ドレミレドとキーをたたいて終わり――ほんとうにそうでしょうか。

今、理解に便利なように、ドレミレドよりは多少複雑で音楽的なものを例にとります。運命が戸をたたくモティフといわれるベートーヴェンの第五の出だし。だれでも知っているミミミド――レレレシ――というあの音のつながりを、ただ無頓着に鳴らしただけで、人に感銘を与えることができるものかどうか。

スコア（総譜）を見ると（次ページ参照）、この曲は四分の二拍子、アレグロ・コン・ブリオ、速度指定はメトロノームで♩＝108となっています。したがって、八分音符ひとつの長さは、数学的にいえば$\frac{15}{108}$秒です。さて、最初のミミミド――は、頭に八分休止があって、それから八分音符が三つ並んでいるから、まず$\frac{15}{108}$秒休んでから、次にそれぞれ$\frac{15}{108}$秒ずつミミミ（G）を奏き、さらに、フェルマータを通常の二倍と勘定して、ド（Es）を$\frac{120}{108}$秒奏く。レレレシ――も同じで、頭の休止とレレレ（F）はすべて$\frac{15}{108}$秒、最後のシ（D）は二小節にまたがってい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com